

水野斉入宛て書簡に見る 『能海寛遺稿』の出版経緯



発表者：隅田正三

**能海寛の最初(11歳・得度時)と
最後(31歳・重慶領事館)の写真**



口 代

2. 予は、全く名利の為にあらず。**愛国護法の精神**よりして、この決心をなす。由て、一つは国家の為にして、一つは、仏法の為なり。この二大義務は成年にあらずしては、容易に成し得られず。由て、通じて**国の為、法の為**に為す。予の一生中の業は、只、この一事にして、その後に於けるは、一地方、一区域に限る国の為、法の為に尽力致す考えなり。

3. 又一つは、この**浄蓮寺の一大歴史に残るべき事越**をなし、後来、当山の住職となる者の為に、この業を企てるなり。

口 代

13. 予の、この度の業に着手以来、その有様おば**郵報**に可致候間。それ**にて御承知下されたく**、又郵状の出れざる地に入り込み候節は、詮方、これ無く候間。**予の写真**をば当寺に**残し置き**候間。夫れにて、予の健康を禱りたまひ帰山の日を御待ち下されたく候。



能海法言 能海寛 水野齊入



能海寛の帰国を待ちわびる留守中の家族

西藏達賴喇嘛教主獅
座下恭維
教祺安吉福壽圓滿
勝額摩西卡印古佛
盛行風俗淳樸唯因山
河遙遠交通不便未
聞有敵邦人到境
者詢亦可憾本寺
派餘海賓親問
都安好昇完教法之
厚流芳德文之異同
宜始到貴境本通人
風俗而探求經之章
月冰寒易如蒙
慈航指導保獲遠人
伊得窺一斑則不
寺之事實斯教之
幸也

ダライ・ラマ13世宛て大谷光瑩法主の親書の写し

肅此佈懇心并請
崇女統帝
慈照不致

大日本本願寺

法主

大石芝


大日本明治三十一

十月十五日

表謹

西上
西光達賴喇嘛教主獅座下

大日本本願寺法主大石芝

明治三十二年十月十五日



淨蓮寺境内図

朱照內當山所有地

天頂山浄蓮寺全景(M40年頃)

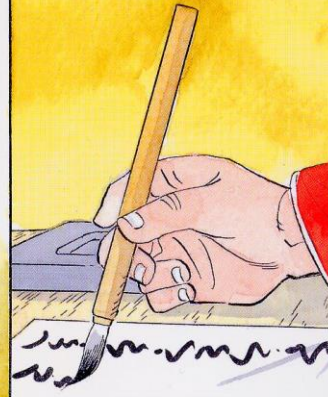


↑ハクモクレン

浄蓮寺蔵

能海寛将来品の一部





静子よ
すまない……
思ったよりも
長い留守になる
でも必ず
志をとけて
お前のところに
帰るからな

わずかなお金で
今からチベットをめざして
奥深くに入ります
困難は増していますが この命を
仏に託して ここ雲南から
西北に向けて発つ覚悟です
重慶から連れてきた連れの者に
手紙を託します 今後は通信が
難しくなるでしょう 明日麗江に
出発します
明治三十四年四月十八日

能海 寛 三十四歳
チベットにあこがれ
ラサのボタラ宮殿を見ることを夢見て
異郷の旅の日々を送った青年僧は
この手紙を最後に消息を断った
新婚三ヶ月の妻を残して

音信を絶ってから以降

能海寛は、明治34年(1901年)4月21日付、中国・雲南省鄧川から愛妻静子への書簡を最後に総ての音信を絶ってしまった。静子は、10年間、ずっと寛の帰国を信じて待ちわびていた。こうした中、明治36年(1903年)12月に静子の夢枕に寛が罪人の姿で捕らえられている姿を夢に見て、不安に駆られた。両親、親戚も静子の気持ちを察して、翌37年8月に静子を上京させ、南條博士や友人を訪ね、消息を尋ねた。この時の様子を子安善義氏は、「偶ま南條先生の御宅を訪ふ、一婦人あり、私は能海寛の妻ですが、夫の音信は分りますまいかとの事に、先生も能海君の細君と聞きて驚き給ひ、小僧(子安)も驚けり。」と、その時の情景を述べている。

明治37年(1904年)9月28日付、南條博士から能海謙信宛に書簡が届いた。これによると、春谷登氏が先月ハワイ別院に向けて布教活動のため渡航した旨を伝えている。「能海寛君の事は常に心に然り居り候」、「明後30日には黄檗宗の僧河口慧海氏再び入蔵の為、東京を出立10月11日神戸にて八幡丸(船名)に乗込みの由に付、寛君の事を搜索を致し呉度頼み入れ置候」と、伝えている。静子が上京した理由は義弟の春谷登の渡航見送りのこともあり、親族代表として見送りも兼ねていたものとも思われる。

横死情報

横死情報が届く

寛の安否を気遣っている郷里の浄蓮寺
家族や友人の元へ、明治38年(1905年)
6月24日付、同郷の岡田利喜太氏が従軍
先で知りえた情報として、同郷の小林久太
郎宛に軍事郵便で能海寛の横死情報を届
けた。

「(前文略)号外 能海豊(寛)氏は、生死不明ノ為メ御互ニ氣遣ヒ居リ候処、当地ノ在勤の軍務署長井戸川少佐殿ハ数年前ヨリ(チベット)地方ヲ巡回セラレタル人ニ付問合見候処折角其の豊(寛)氏の事ナレバ私ニ委細知り得タリ。能海豊(寛)氏ハチベット界ニ於テ土人ノ為メセツガイサレ死去セラレタリ。自分ハ昨年1月チベットヨリ歸リ掛ケ丁度豊(寛)氏ノ死去セラレタル家ニ宿リシニ大日本帝国島根縣石見国那賀郡波佐村出身能海豊(寛)ト記シカベニ歌ヲ書キノ残シ有シ其ノ歌ノ意味ハ残念ナガラ此所ニシテ土人ノ為メセツガイセラレルトノ意味ナリ。依テ其ノ土地ノ土人ニ就テハ尋子見タル処、一昨36年12月中旬ニセツガイセラレタト相違ナキ由ニテ自分モ驚入其ノ歌ヲ自分ノ手帳ニ記シ保存致シ居リ候処分(紛)失シ殘カザル。其ノ歌ヲ直シ本國ノ歌ヲ記シ詳細書面ヲ差出シ候ガ届カサリシヤトノ咄シナリ。尤モ、私ヨリ井戸川氏へ直接ニ面談スル事ニ至ラズニ付過日モ御報申上候通り当旅団付従軍僧トシテ濱田町(現・浜田市真光町)真光寺就職大原義謙氏ハ再度面談セラレルニ依リ、全氏へ依我シタレバ直ニ問合セシコト候処、右ノ次第ナリ。實ニ残念千萬ノ事ニ有シ候トキ尚委シキ事ハ近々私シ方、井戸川少佐殿ニ面談シ御報申上候得共、死去セラレタル事ハ確ナル事實ニ有シ候間、可然御取計イニ下度候。私シヨリ浄蓮寺方へハ羽書(葉書)ニテ只豊(寛)氏ハ死去セラレタル由タシカナル筋ヨリ聞タル旨ヲ記シ悔候文ヲ加ヘテ発送致シ候へ共、土人ノ為ニセツガイセラレタル噂ノ事ハ申送ラズ候。其ノ様御推リノ上御取計イ発表シ下度候。」**明治38年7月7日に小林久太郎あて第一報届く**

これを受けて、

明治38年(1905年)7月9日付、浄蓮寺では早速、父の謙信師が、岡田氏の書簡の写しを添えて、南條博士のもとへ「(前文略)西蔵探検の為出発仕居候處、拙者事非常に老衰、法務難運、困入候に付き、日夜相得受居候。案外其筋より正實之通信、別紙写之通り即今到着仕り、驚入愁傷に沈居候、其由不取敢御通信申上候」と、伝えた。

南條博士は、早速関係者やマスコミに情報を公開した。

明治38年7月25日発行の東京朝日新聞ほか諸新聞は競って故人の伝記を掲載し、勇壮なる旅行の様子を伝え、当時の人々に感動を与えた。

形役者 (二)

小説的結婚

人 あり末の婚約を以て
 中絶し卒業せざる
 廣虎の爲め其母巴へ暫
 年と二年を經れども
 居たるも其内大説
 られて皆その戀人と
 離るるの止むなき
 間に戀人の失意は
 されど新劇部部長の仲
 を擧げて家庭の和樂は
 アリス嬢の花やかなる
 して病の爲に去さ
 一度絶えたる戀の患
 人を迎へ先約を
 して戀しく暇かに今日

交際術
の才色は人ばかりの
交際術に至りては特得
夫人としては一歩の非
夫大徳の名譽を擧
げれば水國の交際術
と眼をみるの態もな
んと人集まる所には
得の交際術と云はつ
て手と交ひる手

西蔵にて虐殺さ
れし能海寛師(上)

▲歸の事 歴年の大分を讀み万難を冒して万里の行程に横道の難題をさぐらんとし終に思遇の奇の處に達せし能く其の如きは眞に日本男子の志を發揚せし快事

大理府鄧州志

子といはざるべからず。寛政は石見の人明治元年を以て那賀郡佐伯村石長田に生れ父は伊達寺の院主、師は其大男なりといふ。師は幼にして蘭語成に東京に出て佛學を究めんとして西六條普通學校に入り新公館主、佛井、渡邊氏等と共に久しう寄宿合生活と爲せしが間もなく東郡に出で少く餘體を養に入り後小石川哲學館に轉じて明治二十六年同段を卒業せり。師は支那博士南條文雄師

A black and white portrait of a man with a mustache, wearing a traditional Chinese garment. The portrait is framed by a decorative border. Above the portrait, the text '民立海龍' is visible. Below the portrait, there is a line of small text, likely a caption or a reference.



と雖も誰一人其西遊探險の目的を達する能はざるを慨し且つ博士より慷慨の詞を聞い

ては同族の金に打たれし國海師は茲に挺身西藏の險に入らんと志す



思ふにせしなり、而して諒の上意は其素志を充
ふんが爲めの一掃したるしに外ならず。爾來
況々、特許部になりにし諒も、日西條約の二子
を絶たず、或は古典義を藉きて其體格の氣を
通ひ、或は滔々として草を叩きて友は誼り、
におくす。貴族院の絶望なり。

鄧州

西蔵の事故に關しては寢食は勿論身を忘る位なりしと、母の姉友氏を呼ぶに能く海能西蔵と呼稱せし程なりとぞ

年、越て廿九年の三月、堅く心を決して上京
 南條博士の宅に寄託して支那語の研究
 續に勵めたり。即ち氏は支那國境を
 西に入らずとせしが爲め勢ひ支那語を研
 究するに便ならずと言ひ書院に入りて日夜
 の勞を惜みしかば三十一年に至り其抑鬱

宛然支那人の如く思はるゝ

女ありき、のみならず父兄は其女と合
得んとせし爲ならんも師には許縁の
更に歸郷せし想ふに此歸郷を父兄の許縁
に上せり 因つて間は三十一年四月を以
て目出度 **華燭の典** を挙げたり、こ

十七、男女老若の精神は一體はし
間に充てられ、一旦人の妻女として
からぬ風変わりあり。此説は弟子に創
己の声援は僅はさうあつても止めの
難を幸ると直ぐに付く情りであつた
日清戦争の爲め、今迄にして置いた
實にお前には愛の事な事だが、こゝ
爲め、我佛教の爲めだから何うか
にさせてくれ」と同穴の語未だ能
ざる同年の十月二日絶を辭してせ
に就けり、のみならず「自分は聯合
いらうが思ふ存に死ねば止まら
で死ねば自分を殺す」と已に決
覺悟を以て、西日に上京し、
を請ひて積年の病を以て本日を目
し得たりとの喜びの別を告げ
船に搭じて上

道される

清國の留學士

黄死が報道

新聞で横

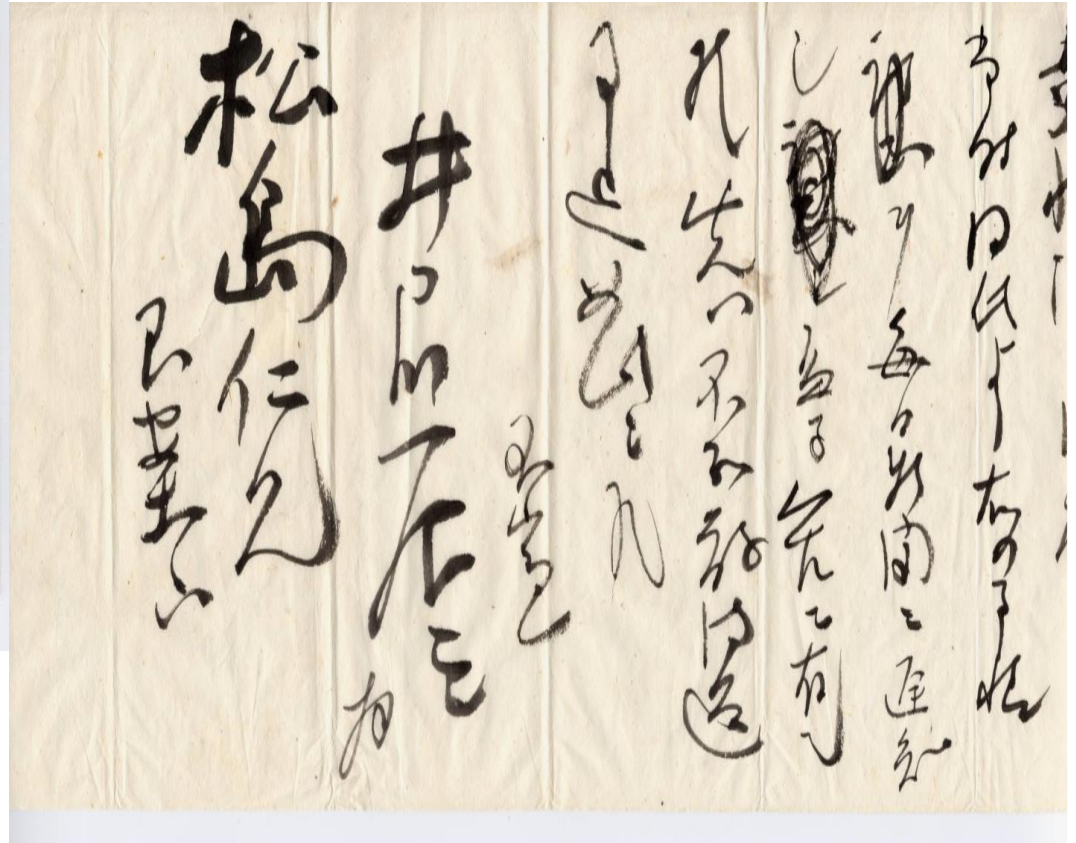
報知新聞

女は、利権を奪つて、今何の利権も得ない。男は、利権を奪つて、今何の利権も得ない。女は、利権を奪つて、今何の利権も得ない。男は、利権を奪つて、今何の利権も得ない。

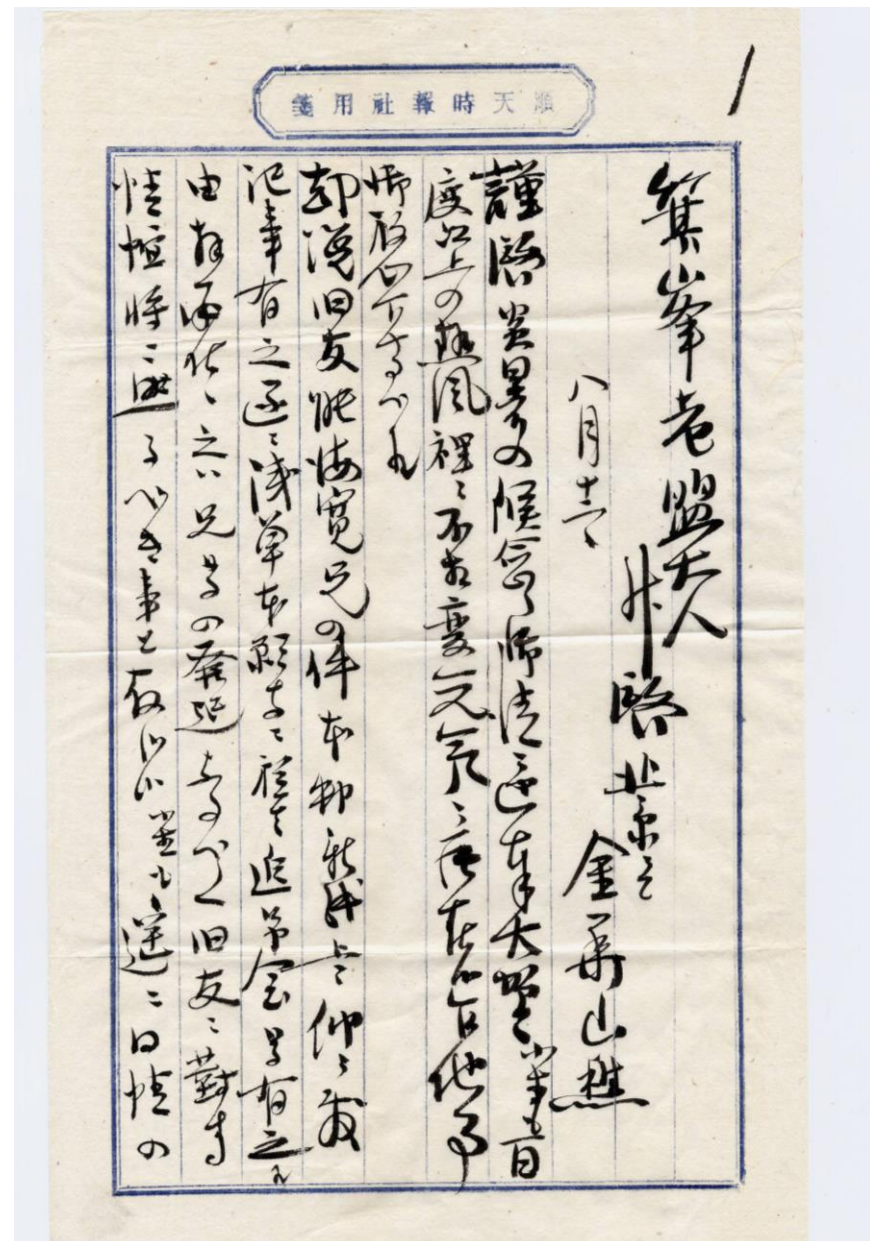
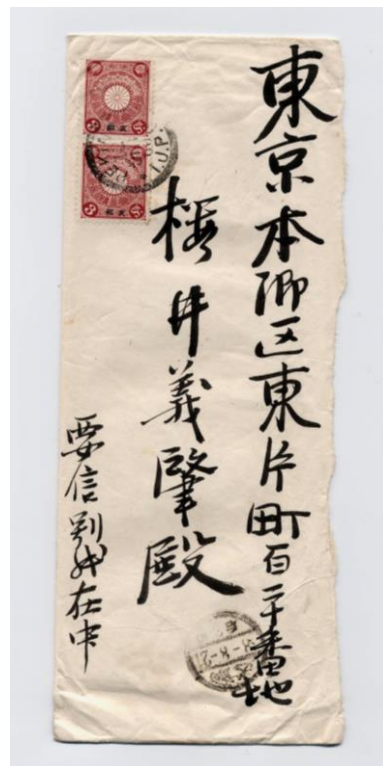
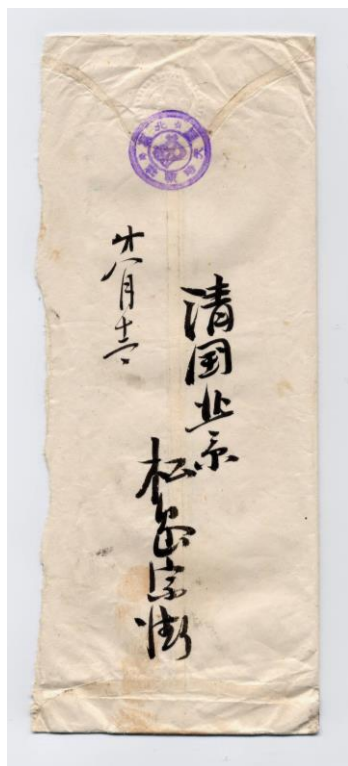
報知新聞で横死が報道される



井戸川辰三 ⇒ 松島宗衛



能海寛の横死情報の真相を照会した結果誤報の旨の
書簡を受け、反省会雑誌の桜井氏へ転送した。



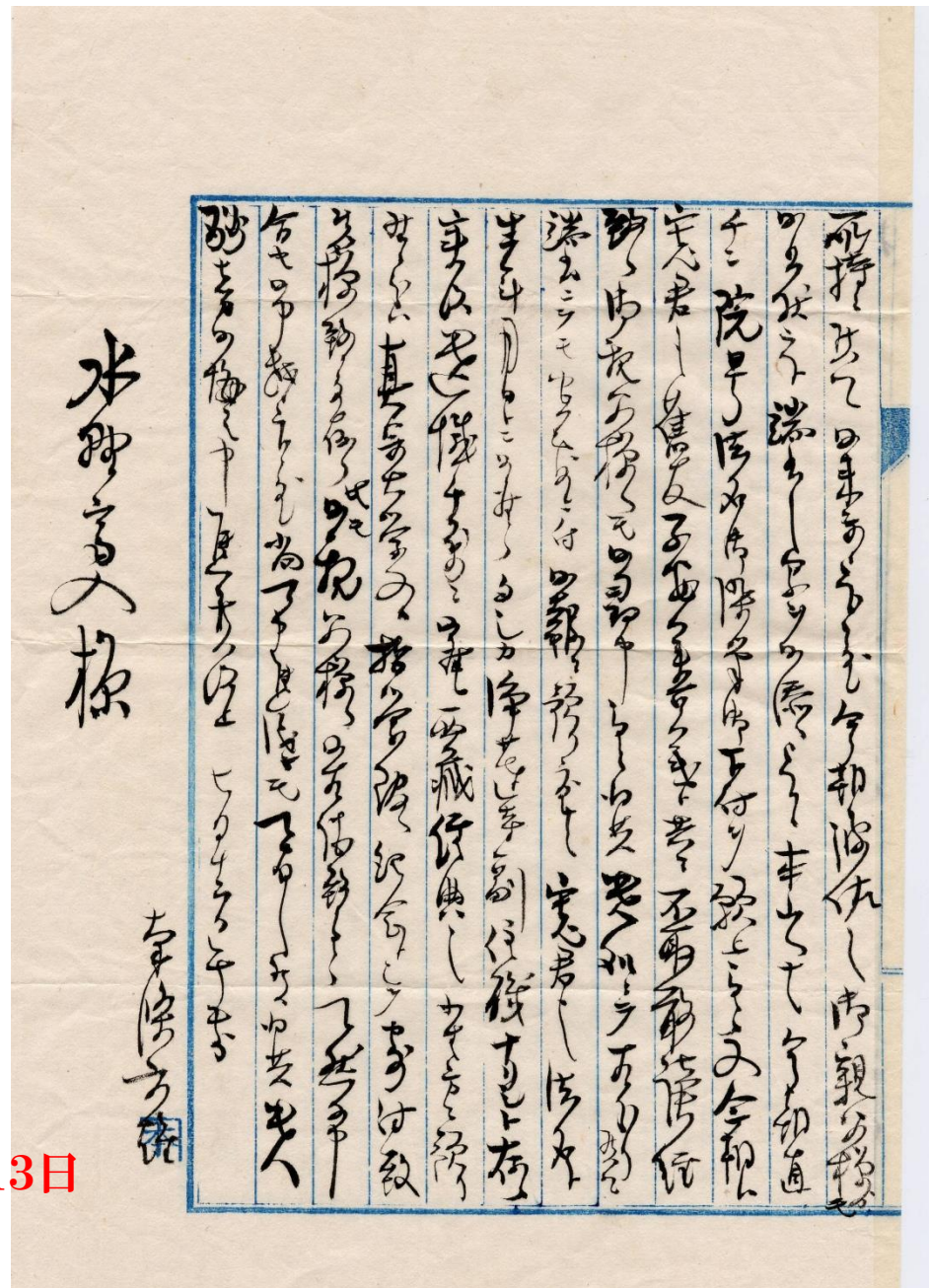
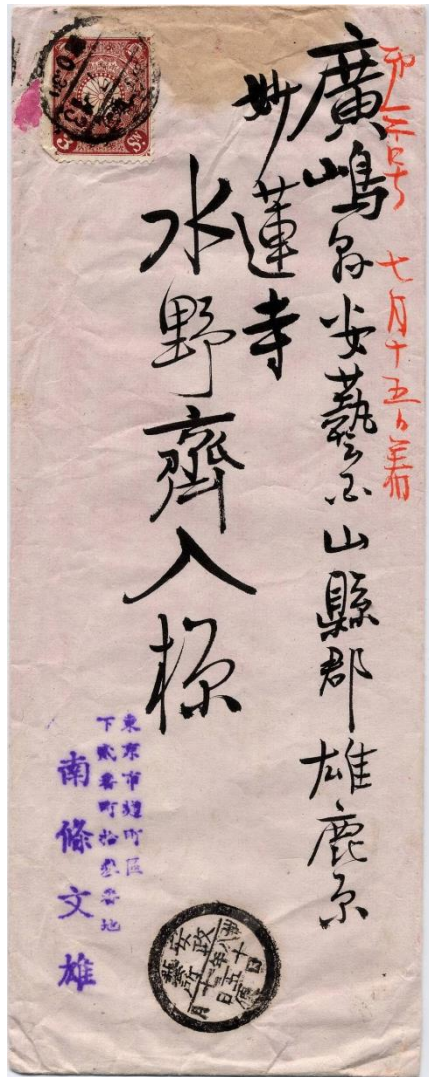
明治38年8月、井戸川辰三氏から北京順天時報の松島宗衛宛の軍事郵便の書簡内容を要約すると、友人能海寛師の事に付き問い合わせについて回答の形で書面を認め送付している。

「(前文略)岡田氏の又聞きとなり之に、36年12月20日(小生大理に赴きたるは36年5、6月頃なり)とか又は石見国波佐……とか、色々のヒレヲ付ケ而シテ小生の談話の様ニして、其を親に違伝せられたるが、この度の訛傳の原因と相成如し事と存候。(以下略)」

松島氏はその書簡と封筒を同封して、8月12日付けで東京本郷区東片町120番地の桜井義肇氏(『反省雑誌』主幹)に送付し、ご一覧の上ご判断をとっている。

桜井氏から南條博士へすぐさま知らせが届いた。8月24日付け南條博士から水野齊入宛に詳細な文面が届いた。

明治38年(1905年)8月18日付で、謙信師は、南條博士宛に次の文面を送った。「(前文略)井戸川氏の回答に接し候へば、横死之事件全く訛傳憶説との説、愁慮忽ち變じて安慰、驚喜相催候。帰国の時期、期待受申居候次第に御座候。此段敬白化候。」と、横死の報せが訛伝であつたことでの最悪の状況から脱した安堵感を率直に述べ伝えている。



南條文雄⇒水野齊入 明治38年7月13日

井戸川辰三



松島宗衛



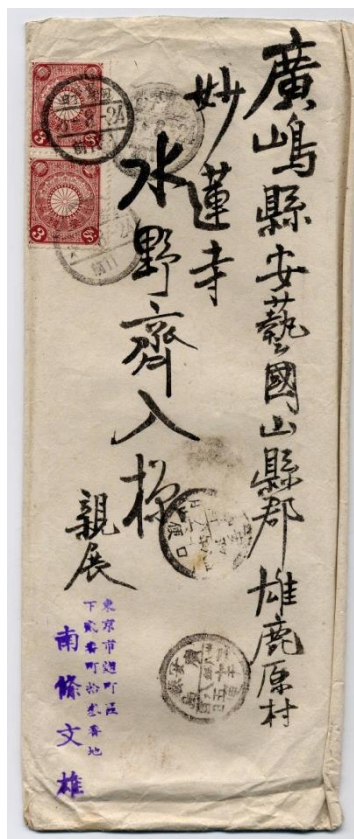
桜井義肇



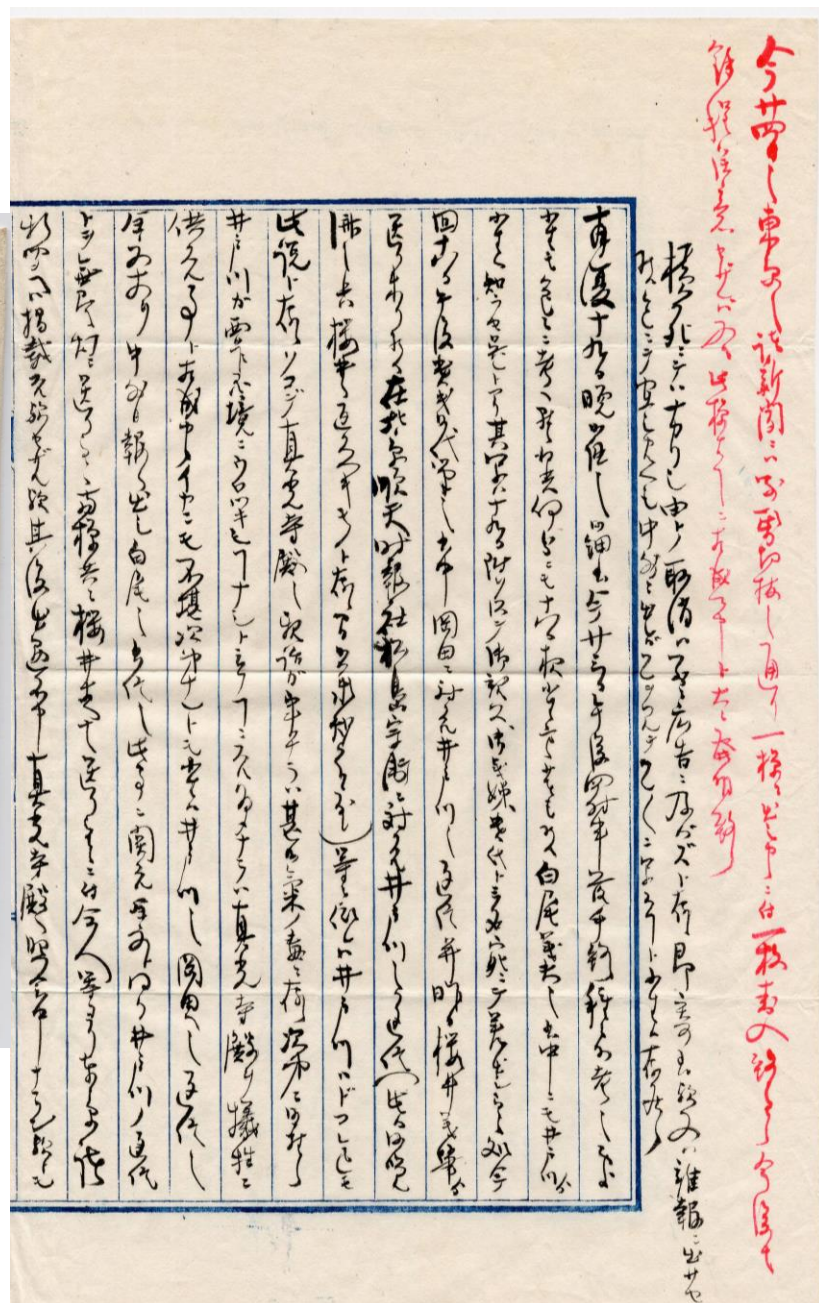
南條文雄



水野齊入



明治38年8月24日



郷里の小林久太郎宛に従軍先の岡田利喜太氏から井戸川辰三氏からの訛伝である旨の書簡を同封して来た。井戸川氏は、7月26日付の「時事新聞」を見て岡田氏へ**訛傳臆説**であると書簡で述べている。

原田鐵氏の『能海寛遺稿』247Pに掲載されている文面によると初めての出会いは東京の詠帰舎で中国語を習うとき、2回目は、31年冬四川省で再開、3回目は、32年6月ダルツェンドで、4回目は、33年11月4日、土民の迫害にあいラマ僧姿で四川にたどり着き、3か月静養した。34年2月更に雲南を目指して出発したのが最後の別れとなった。そのとき計画が失敗すれば「更にインド方面から道を求めん」と笑って答えたという。

36年夏雲南に遊び大理府を過ぎ、一夜客舎に投じ、その破壁の間に我国風一首を見出し、紙を伸ばしてすき写して持ち帰った。このことが貴紙上の記事「36年12月」訛伝に非ざる乎。 大阪毎日新聞38.8.12

※ 36年夏は、井戸川氏も同伴？建築家の伊藤忠太博士の一行の雲南での行動も併せて検証し直すことが必要である。

追悼法会

(明治38年7月)

明治38年7月26日午後3時浅草本願寺にて
故能海氏の追弔法会を催し、南條博士が導
師を勤め、南條博士が渡清以来の経過を報
告、能海氏が重慶より博士の元へ送付した西
蔵経文、小塔、鈴などを陳列し博士が説明を
加えた。未亡人静子も参列し香を手向けた。
哲学館大学長井上円了氏は弔辞の中で、次
の漢詩を即席で哀悼の一首を贈った。

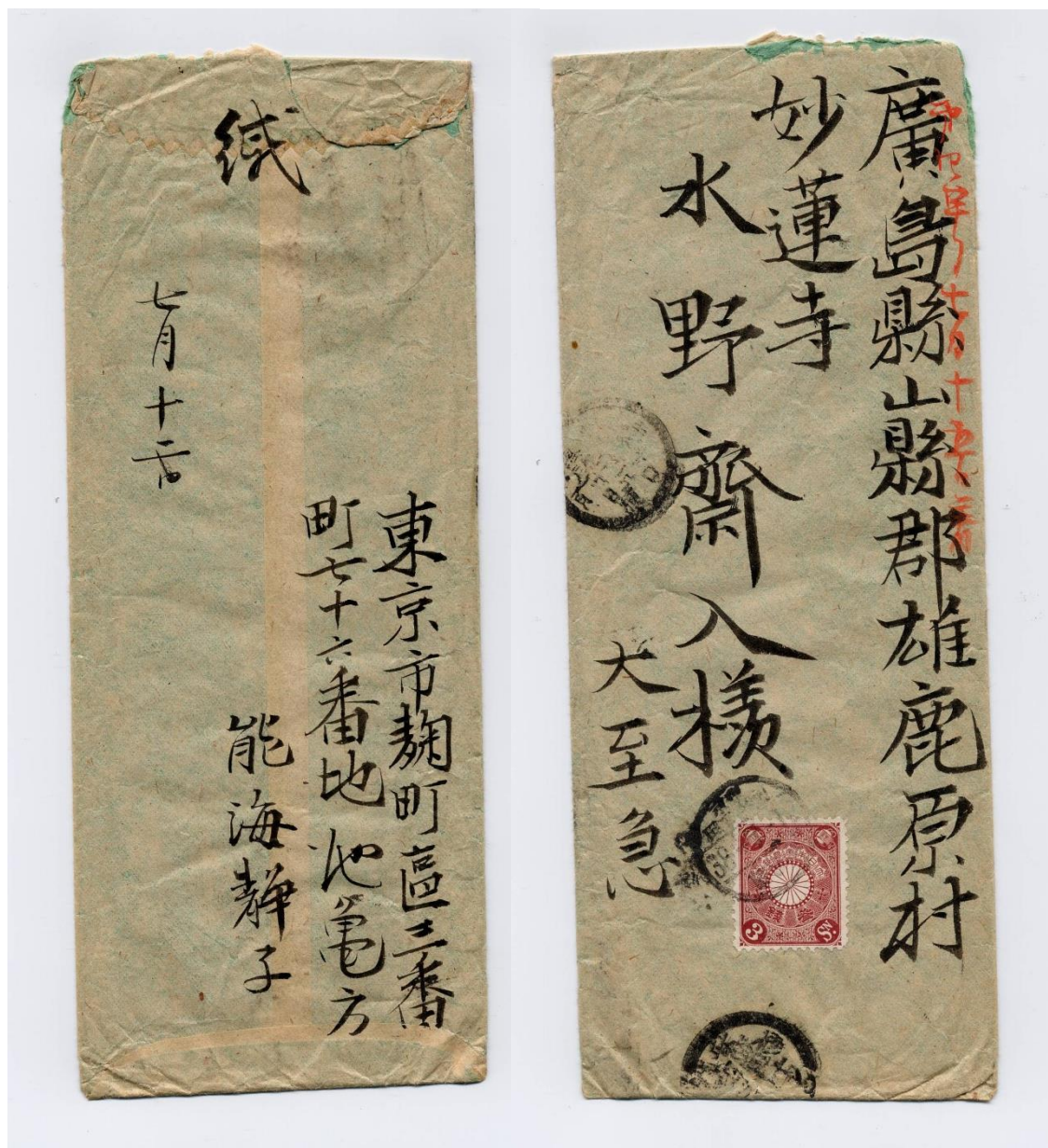
君曾決死向西蔵
不報平安已幾霜
一夕悲風傳凶信
痛心難禁淚手行

参列者は、普通教校の同志、桜井義肇、長沢則彦、梅原融。哲学館の同志、高島円、安藤弘、境野哲海、安藤正純。子安善義、白山謙致、平松理英等友人が多数来会した。

散会后、生死について諸説ある中で、井戸川辰三氏(少佐)の新聞報道(訛伝説)を尊重することとなった。

明治38年7月12日付け
東京滞在中の静子夫人
からの書簡

能海静子 ⇒ 水野齐入



能海寛の将来品が手渡される

能海寛君竹藏西藏經典目錄

第一號	賢劫經上卷	大本	二百三十一葉	金銀水字
第二號	全	下卷	二百三十一葉	同
第三號	賢劫千仙經	同	二百三十一葉	版本
第四號	南無三寶教師法王不レサレガボレ作	大本	二百四十一葉	金銀水字
第五號	ウレゾレ語(書名不明)	上卷	大本二百五十五葉	金銀水字
		下卷	同	同
第六號	金光明經	中大本	二百三十一葉	同
第七號	八千般若	上卷	大本二百四十一葉	同
		下卷	同	同
第七號二	金剛經文	同	廿五葉	同
第七號三	金剛經	同	廿五葉	同

大板裏の裏に
百八十一葉の
目録に書かれた
三十一とあるは
二百三十一とあり
て

要板ノ裏に
三十一とあり
て又月曜に
トあるは
ナリ

第七號	王明	同	二百三十一葉	同
第八號	減十罪經	小本	一百八十一葉	金銀水字
		全	廿六葉	同
全一	減罪經	同	廿五葉	以下欠
全二	諸佛來往	同	廿五葉	同
全三	全上	同	三十一葉	全二枚
全四	無想經	同	廿五葉	同
全五	無想經	同	廿五葉	同

右明治廿四年七月七日付、お前藏委ノ書信中ノ目録に按じ、
有レるは即チ本藏雅氏ニ托せしに、領得置人ト稱する様々し、又其翌
廿四年八月五日、西京ニ奉來候り、受取東京自宅ニ預け居る如き回
其第六號(主地丁敷調書)上と廿四年七月五日、原由録置氏ノ持來也
諸品在中ノ紙函一個トシ紀念物トシ傳引候しヤ、此也

明治廿四年七月二十九日

東京市麹町區下二番町ニ番地

南條文雄

能海靜子殿

静子夫人は、明治42年中に西川氏と再婚

謹んでお詫言ふ所あり
あさきうきまのちのちのちのち
あやめくすのちのちのちのち
西川氏 一月一日

郵使はかき
那賀郡波佐平
澤蓮寺様
那賀郡和田
西川氏
静子
通製原刷印 近親省消通

十七回忌法会 (大正6年)

大正6年(1917年)1月20日付、寺本婉雅氏から水野齊入宛書簡によると「故能海寛君生死不明本年早や17回忌に相当候間、小生等南條博士と協議發起人として来5月18日故人の誕生日を以って……」と、真宗大学において、記念法会、講演会、故人の遺物を出版することを知らせている。追伸において、故人の遺物行李、支那の衣服、書籍、携帯品等全て写真に撮影して至急御送されたい旨記載している。

此傳阿部幸高長月見相話語不問振在之申長
 祐業内より長
 為柳氏子に及人として瑞石を得申且本心報先一日二十方
 氣力花に應先附
 故人の遺物行末支即衣教書新撰常念子讀之而美
 に振舞へ至る所送るなり是次に石板抄を以て、事案中
 字々事内いふ言附合するは、
 法注主台下には有りしを由り書にありと題字を執り其
 等諸如く或は、あるいは八と見ゆも亦通句持止止と有る迄

廣東縣小縣雄鹿宗村
物運寺
永野齋入啟

至急 礼度

京都鞍馬口室町殿

古堂先生學

故神速寬君遺物以版石所

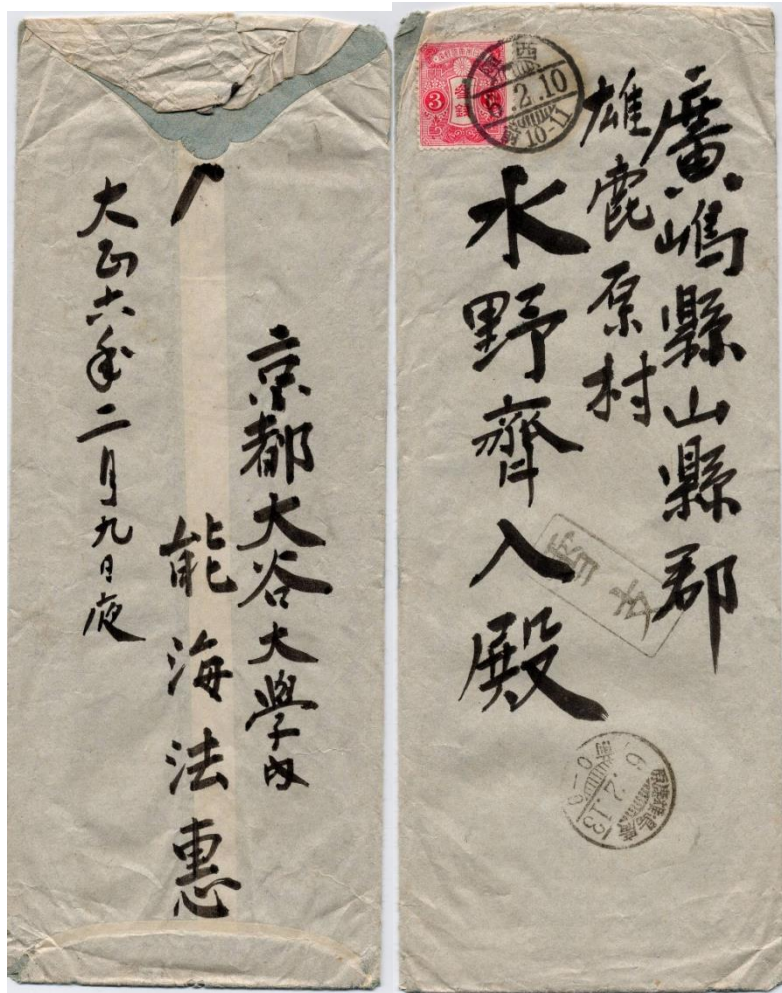
嫁仕女

寺中遊記

寺本婉雅 ⇒ 水野齊入 大正6年1月25日

叔豫て一月の宗報、二月六日中外日報、二月十日大阪朝日京都附録、寺にも
出せあり又寺本院雅氏より照会せられし事として充分御承知之通り
寛叔父様の消息絶えたり、今年が丁度十七年目に當ること
南條、高橋、藤岡、村井、井川に本山役員、大中学教授、寺の
方々より誕生日なる五月十八日を計りて追悼会を勤め尚ほ講義
会、遺物展覧会等を催さる、皆に御座候又紀念として遺稿
出版せざる事にて人々津衛中にある事には云はすとも御承知の事と存
候、就ては去る七日當大監子にて寺本院より私に來て呉れよ事
にて早速矢張り候、慶其時先生の申さるには「右の件云々に就いて
お前の父に遺物送る様にと、或差出候に何の返事しなくまた水
野氏へも書面差出置候に、永又何の返答も無之て次には南條
さんより手紙を出して貰ひ、~~井川~~が今に返書に及ばず云々」と
と申されて少々立腹の様子見え申候、そこで私とよく考へ
見ると波佐よりは免れ角として首肯致さるは返事を出される筈な
るにと不審に賞え申候、それについてお蔭かゝり或差出して置

いて呉れと申され候に、早速差出す考へにて居候、慶昨夜六時
御通信信に接し直ちに返すのよしされぬ理由を承知仕候、中庭
の雪七尺も有之と毎日大吹雪致候とは是れ相談せざる、ことの出来
ざる事、至極御尤もと存候、寺本院先生の云はれたに就いて其
の事我と同時に波佐へ差出置候間可成相談の出来次第相談
成し下されて御返事を差出被下度願上候、寺本院先生より送られし
書面も趣きは如何なる事にや確かに存せし候へども御人に返すの出来
ぬ事ならぬ猶一層早く御返出を願上候、先は寺本院先生のいはれたに
就て一應申述置候、尚ほ紀念出版の書籍の表紙に就いて
寛氏の定紋の必要あるは、其紋がお前の羽織の紋と同じなれば、それを
寫して出して呉れと申され候間早速羽織の紋（タカモカ）を寫し
差出置候、別に寛叔父様の紋としては無之と存じ居り候へども万
一寛氏の紋も別に有之候（は早速御教知被下度願、為念申
添へ候、
兼ねて小生もいつか寛叔父様の追悼会なり法事なり勤むればよいが



能海法恵⇒水野齊入 大正6年2月9日

NO.

幾度か出来ぬがらう。思存候度、今年は斯くやり、方々によ
りて追悼会を営まれる事と、先づに終るべく思存候
而も、大谷大書院の学長南條先生の発起にて、この大書院を催される
事と、小僧は猶ほ一層嬉しく感じ居候。幸々先生よりお前にも手
伝を下さるれと申され候間、報恩の爲め出来得る限り力を盡し
て侍する所盛に候。送られし短文、佛像、寺教集
當大學圖書館に納しあると、事には在候。
此の追悼会に就ては、新めて用事おはする所盛と申存候。
先札等ながら、御依頼まで。
末筆ながら、一統様へ宣教師傳言、此度御自愛事一に
奉存候。二月九日夜 勿々不備

叔父上様
(廿二日)

能海法恵

上日業修科三年の生徒、故郷にて死去せりと、事と、皆集りて統經を申し、悔状と、差出
たるよし、多く指之候。いかに昨日にありて、ある人より、其事の傳に、その人の祖先を、その
子孫より候。不肖の輩も、亦あり候。わがの如く、寛和工務が飯を、何れなり如何でせう。

拝見先便と云申し、定部連、新中へ押
 入、今、師、高、一、年、有、之、は、三、月、の、日、送、附
 あり、ふ、大、方、を、は、給、お、理、一、し、し、去、下、再
 其、有、無、と、由、を、知、り、給、ふ、し、最、早、に、復、り、と
 無、之、と、思、ひ、給、ふ、道、す、の、し、に、毎、日、お、祈、り、を、し、給、ふ、と
 思、は、れ、也、故、清、の、お、祈、り、を、し、給、ふ、と、思、は、れ、也、
 あり、成、る、と、思、ひ、給、ふ、し、に、お、祈、り、を、し、給、ふ、と、思、は、れ、也、
 お、祈、り、を、し、給、ふ、と、思、は、れ、也、お、祈、り、を、し、給、ふ、と、思、は、れ、也、

郵便便はき
 水野齊入様
 京都府山縣郡雄鷹原村
 妙蓮寺
 主部新馬口室町頭
 真定大膳
 吉平淑雅
 製造局刷印
 行發省信通

寺本婉雅 ⇒ 水野齊入 大正6年3月6日

大正6年3月16日付、西川静子(この時には、既に再婚して西川姓となっていた)から妙蓮寺宛の手紙によると、

「(前文略)御院家様(寛)渡清後、本年が丁度17年(17回忌)に相成其に付・・・

『能海寛遺稿』 (大正6年)

亡き友能海寛を悼む

寺本婉雅

巨眼豊頬の容貌、豪邁不羈の氣象、堅忍不拔の決意を抱いて遠大の目的を企画せられた能海君を追懷默想せば、髣髴として嚴容を眼のあたり見る如くである。(中間略)

西藏探検の同伴者として、眠食を俱にせし余の瓦全存命せるに、君や独り亡くし。回顧せば明治32年6月29日、西藏第一関門ダルツェンドに至り始めて君と邂逅した。吾らは一見旧知の如く、肝膽相照らして互いに同志を喜び、生死を一にせんことを誓約した。行雲流水、峨々たる雪山幽谷を跋涉し、野に寝ね、山に伏し、蛮人の白刃をくぐり、蛮狗の襲害を蒙り、念々称名、歩々生死を色味しつつ、32年8月11日、第三関門巴塘に到着した。

本年は君が生死不明以来十七年ら相当するからそを
祈念せん為め、君の追悼法要を営み、その遺稿を
編纂し、故人に関係深き人々の序文、書翰、感想をも
併せ、尚江湖知名の士の賛助を得て、この能海寛遺稿
を刊行したのである。若しこの因縁に由て、君が犠牲
的先駆開拓の功を世に紹介するを得ばまことに結構で
ある。ここに、余はこの遺稿上梓に就いて多大の賛助
を垂れ給いし諸士に対し、亡き友に代りて深甚の謝意
を表し奉ります。

願くは、この一稿汎く世に流布して勇猛なりし求法僧
としての亡き友が永久の碑銘たらしめよ。

大正6年3月28日

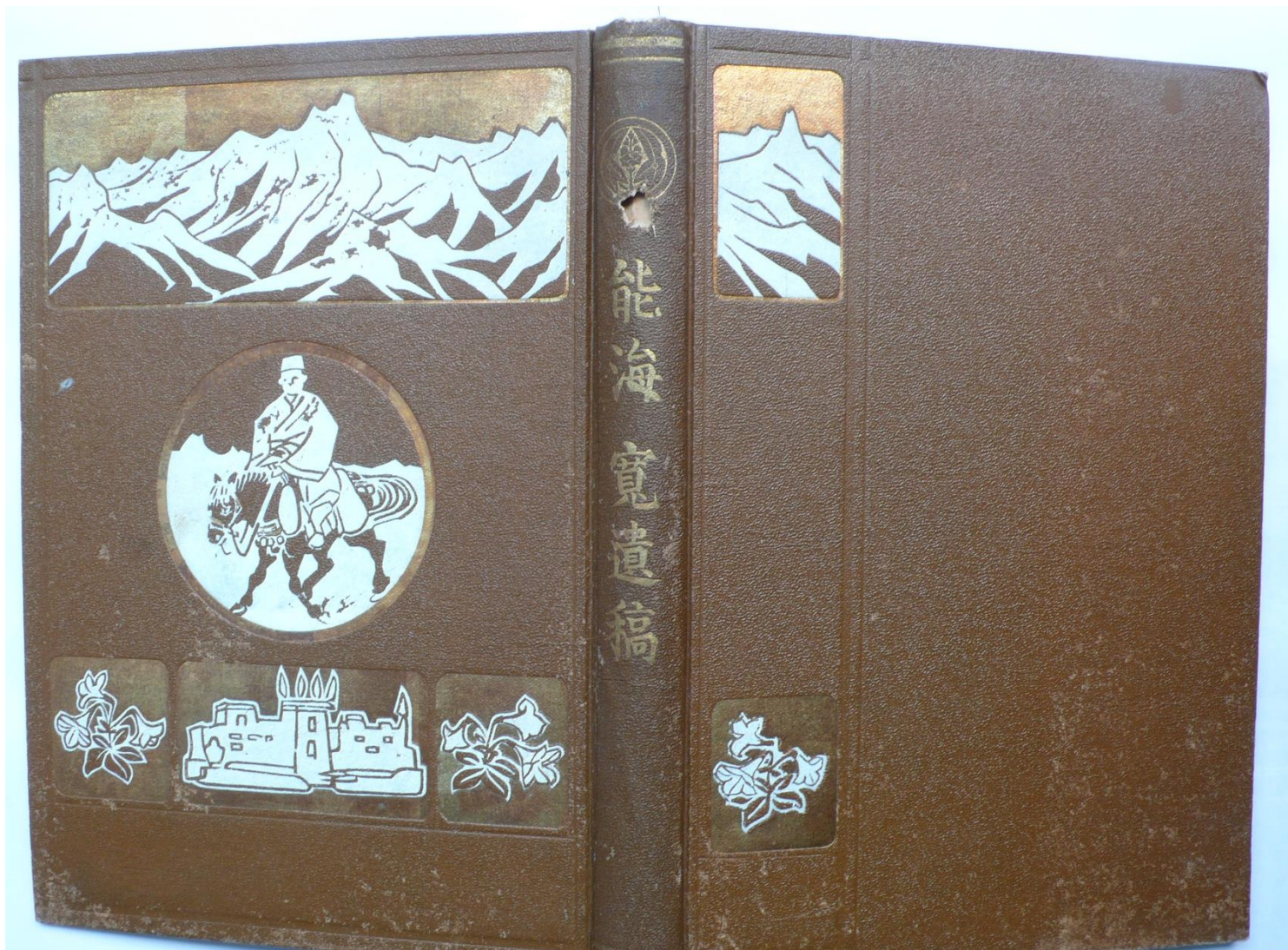
京都真宗大谷大学に於いて
寺本婉雅識



大谷法主(光演上人)より「不惜身命」の書を下付される



明治32年3月22日・重慶領事館



『能海寛遺稿』の表紙デザインは、折多山の雪山風景、馬に乗った能海寛、高山植物などを福田眉仙画伯の意匠によるものです。

南條文雄殿閣下

解海

能海君最後通信筆蹟

明治34年4月18日付



能海寛将来品「西藏經典など」現在は、大谷大学博物館に所蔵されている。

大正六年五月廿日、亡友能海寛君の十七年忌を弔んとて寺本さんより同君に就て知る所あらは知らせよとの事です、小僧の想出す丈を申し上げます、小僧の能海君を知りましたは、明治廿二三年の頃、小僧が慶應義塾にありし頃、君は桑門志道さんの賢息と共に三田の北寺町西蓮寺白山君の所に居られました、小僧は白山君とは同級でしたから、白山君方にて終に知合になつたのです、三田での能海君の事は白山君がお精い筈です。

同廿三年十月より小僧は、南條先生方の食客となり、梵學を研究して居ました。其時分先生の御宅は麴町區元園町一丁目でした。廿四五年頃には能海君は哲學館在學でしたから本郷から、白山君は三田から、毎日曜に先生の宅へ御出でゝして、マクドネルの文典や大經の梵本を共に讀みました。大經讀了の日には、紀念の撮影をしました、三枚一組の寫眞各自署して一枚づゝ分けました、自署の名前は左の通です。

岐阜縣安八郡澤渡村淨勝寺

斐川

子安善義

東京市芝區三田北寺町西蓮寺

沛南

白山謙致

島根縣石見國那賀郡波佐村

天頂山淨蓮寺

石峰

能海寛

明治廿六年七月七日に、梵文大經の會讀を終り、能海君は歸省されたのです。これを自署さるゝ

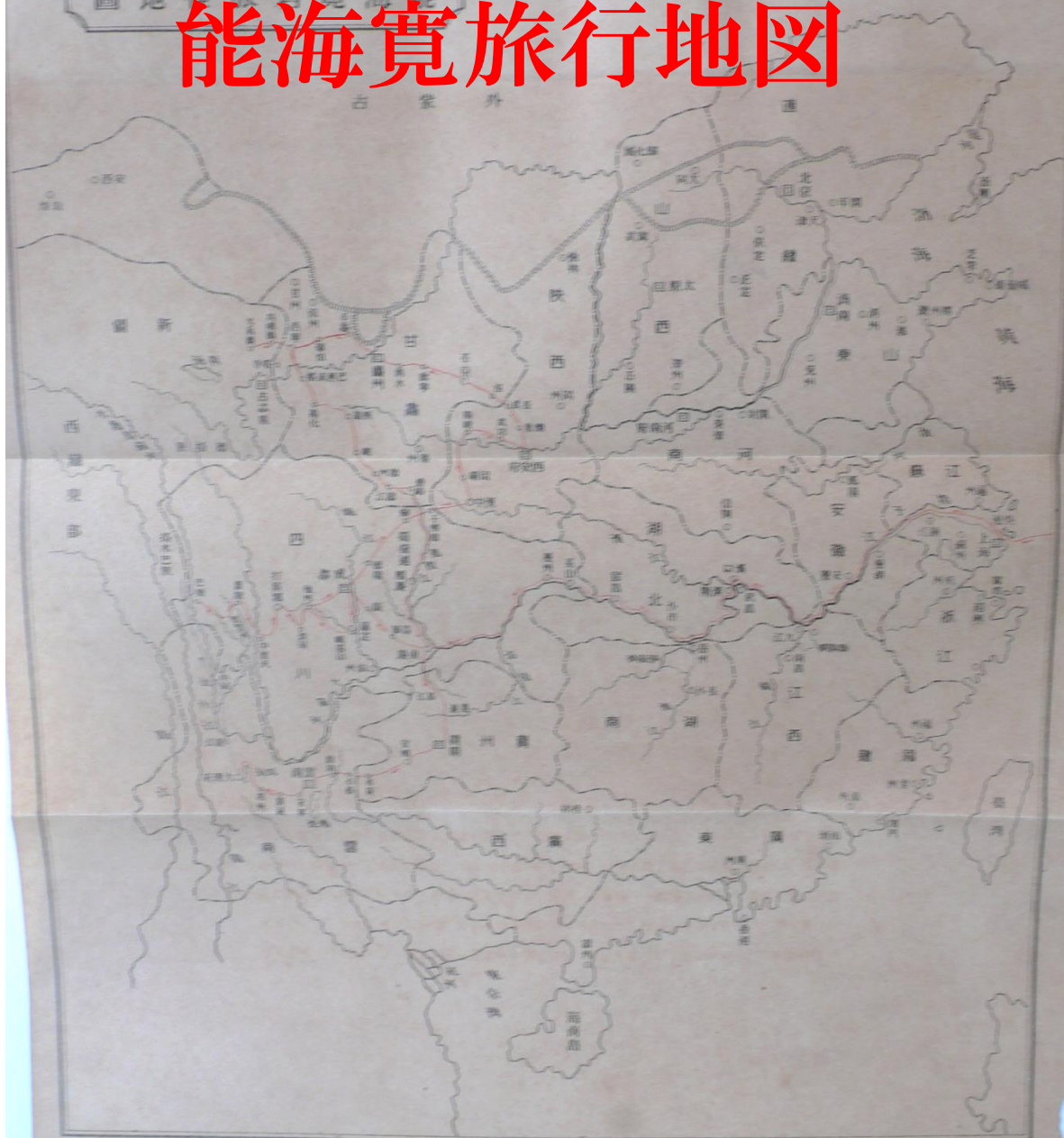
時も、能海君は寺には山號を附すべきだと大威張で大本山でゝもあるかの様に天頂山と書かれました、小僧は淨勝寺西蓮寺との總本山で、君の御寺は淨蓮寺だと、呵々大笑しました。

小僧は廿七年一月歸寺しましたが、時々東上して南條先生の御宅に食客として、楞伽の梵本など讀ませて戴きました、能海君も東上されまして、先生の御宅は上六番町下二番町と轉宅になりました、能海君と共に先生の指導を受け、字書編纂の仕事を行なうが、梵書を讀んだのですが、能海君は西藏探検の勇意勃々なので、支那語の練習やら、又はシュラギントワイト氏の西藏文典を研究して居られた、温健な勉強家でした。東上の途次美濃の小僧の寺にも來泊された事もあり、素朴にして多く語らぬ風でした、意志強固にして、仲々の論客でした。日頃統計を好まれ、新聞等に何頃の統計表が出てあれば寫取られた、今から考れば入藏の仕度に國家の大勢を觀測された様です。明治卅一年の三月廿八日の小僧への來書左に（書信取捨）、

君の彌入藏を決するや、小僧は、

能海寬旅行地圖

能海寬旅行地圖



般若心經西藏文直訳

般若心經西藏文直譯

一、案ズルニ罽賓三藏般若共利言譯ノ般若波羅蜜多心經ニ符合ス。

二、梵文ハ英國出版ノ大心經第一「セー」、第二「ダダリユー」ニ符合ス。今ハ「セー」

ヲ冠頭ニ記ス。

明治三十三年三月二十六日、梵藏漢英對照譯出訂正畢ル。

॥ प्रज्ञापारमिताहृदय ॥

ॐ॥ རྒྱལ་ཡུལ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ ॥

Ces-Rab Smin-Pho bshugs-Sha

般若心經

प्रज्ञापारमिता

॥ ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ ॥

Samas-b Sam b Rjod-Med Ces-Rab Pha-Rol-Phyins

凝念讚絕智慧到彼岸

अनुत्पन्न अनिरुद्ध

॥ མ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ ॥

Ma-Skyes Ma-ba Gags Nam-mkhachi No-Bo-Kid.

不生不滅虛空ノ性

般若波羅蜜
多心經
沙門般若奉
詔譯

序

能海寛君は予が同窓の友たり。同窓の友にして異郷に客死せるもの亦少しとせず。特に君の臨終に至りては、その事蹟を審にする能はざるは、我等が最大恨事とする所なり。思ふに打箭爐客舎の夕、七十二峰月明多き處、空しく西征の恨を抱きて世を辭し、芳魂鎮へに補陀洛城に住し、跡を追うて入藏の險を冒すものを守護せるか。君の歿後足跡相踵ぎ入藏其人あり。西藏は既に祕密國の域に非ざるに至れり。是れ豈君が先驅開拓の功に由らざらんや。

匈牙利國のアレキサンダー、チョーモ氏、君に先だちて入藏せんとし、病の爲に身を殞す。マクス、ミュラー翁極力その言語學の爲めに身を犠牲にしたるを稱揚す。君の實力、氣慨必しもチョーモ氏の下風に立つものに非ずと雖、その功績を詳にすべきものゝ存せざるを遺憾とす。今諸友の力に依りて厘かに遺著の一部を公にするを得たるは同慶の至りに耐へず。西藏既に祕密國に非ず、千歲の下、君の最終の祕密を解し得るの時機果して來るべきか、嗚呼。

大正六年三月七日

仙馳坊梵學書に於て

雪下道人 高楠順次郎識

高楠順次郎氏の序文

「能海寛君略伝」南條文雄氏記

能海寛君略傳

君、名は寛、法名法流、石峰と號す、能海氏。明治元年五月十八日、嶋根縣石見國那賀郡波佐村字長田の眞宗大谷派淨蓮寺に生る。父は同寺前々住職能海法幢、兄は現住職法言、二弟一妹あり、二弟は水野齊入と紀皆乘となり、水野氏は廣嶋縣安藝國山縣郡雄鹿原村中祖妙蓮寺住職、紀氏は石見國那賀郡長安村本願寺派勝龍寺住職なり、妹初子は濱田の藤村氏に嫁すと云ふ。十二年十月二十八日君は京都本山に得度して、眞宗大谷派の僧侶となり、十九年本願寺派の普通教授に入りて、宗乘餘乘及び普通學を學ぶ、文學博士高楠順次郎氏、及び往年印度留學中病沒せし東瀛讓氏の如きは、皆當時の同窓なり。君の西藏探檢の志は已に此時より發起せり、即ち同校の反省會雜誌に其必要を論ぜしことあり。二十三年東京に到り、梵語學の同志白山謙致氏の住せる西蓮寺に寓して、慶應義塾に通學し、幾ばくならずして哲學館に轉學し、二

十六年七月卒業せり。尋で郷里に歸ると雖も須臾も西藏探檢の事を忘れず、常に冒險の行爲を試み、或は單身富士山嶺に登り、或は好んで深山幽谷を跋涉す。曾て一船夫を傭ひ、小舟に乗り、唯好む所の尺八一本を携へて、東京灣を發し、伊豆七嶋を巡りて歸りしことあり。二十九年三月十日、遂に意を決して東京に來り、余の寓居に住して梵語を研究し、日夕必ず善隣書院に到り、宮嶋大八氏に就て支那語を學習せり、爾來二年間、余は君と起居を同うし、常に其堅忍不拔の志に感激せり。三十一年四月、君歸省の情を陳す、余も京都に行くべき事あり、二十一日相携へて東京を發し、手を京都に分つ。六月、君、佐々木靜子を娶る、然れども父母も亦其志を奪ふこと能はず、遂に其宿志を果さしむ。十月四日、郷里を發し、親戚故友を歴訪し、十一月七日突然余の家に到り、時機熟せりと告ぐ、其喜び知るべきなり。九日親友十餘人と神田寶亭に會食し、十日欣然として東京を發し、十二日西京丸に搭し

て神戸を辭せり。其以後の消息は、余に寄せ來りし十有六回の通信と、其實弟及び親友に寄せしもの、并に其友人の報告、合せて四十三通あり。進藏行程は之に據りしなり。而して三十四年四月二十一日、支那雲南大理府鄧川州發を以て最後信とす、其父母兄弟内子、又は本山及び親友に寄せし通信も此後の且附のものは更に有ることなし。然るに意外にも、君は已に三十六年十二月中旬西藏國界に於て横死せしとの報を得たりと、三十八年七月八日の日附を以て、君の親父能海謙信氏より通知あり。是に於て君の親友相會し、淺草本願寺に追弔法會を開き、諸種の新聞雜誌均しく君の事を掲載せり。而して翌月に到り、君の横死は訛傳なりとの通信を得て、今日に到るまで復た君の生死を詳かにすること能はず、遺憾の至りに堪へざるなり。特に今年は通信の來らざるより十有七年に達して、追憶の情忍び難し。是より先き、明治四十三年十一月太田保一郎君、能海君の西藏譯般若心經の和譯を刊行して其名を

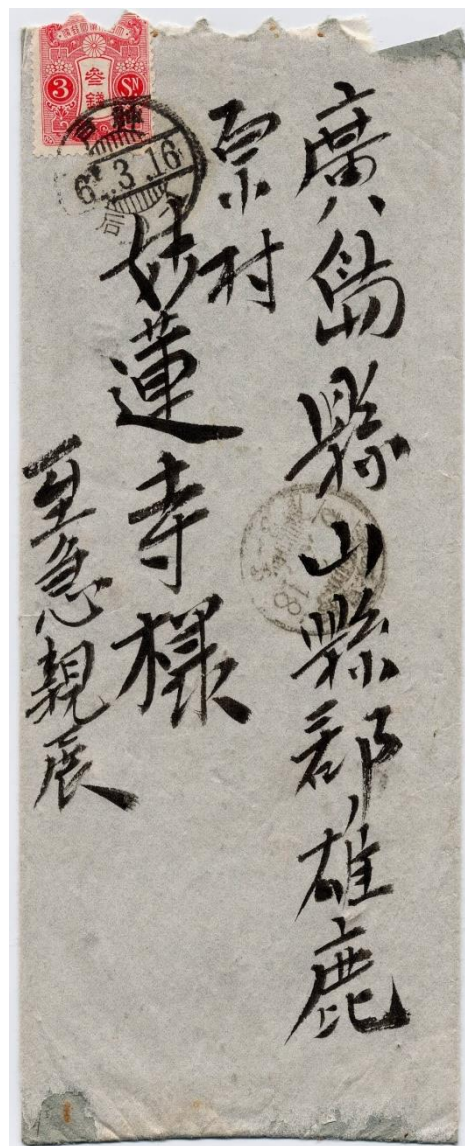
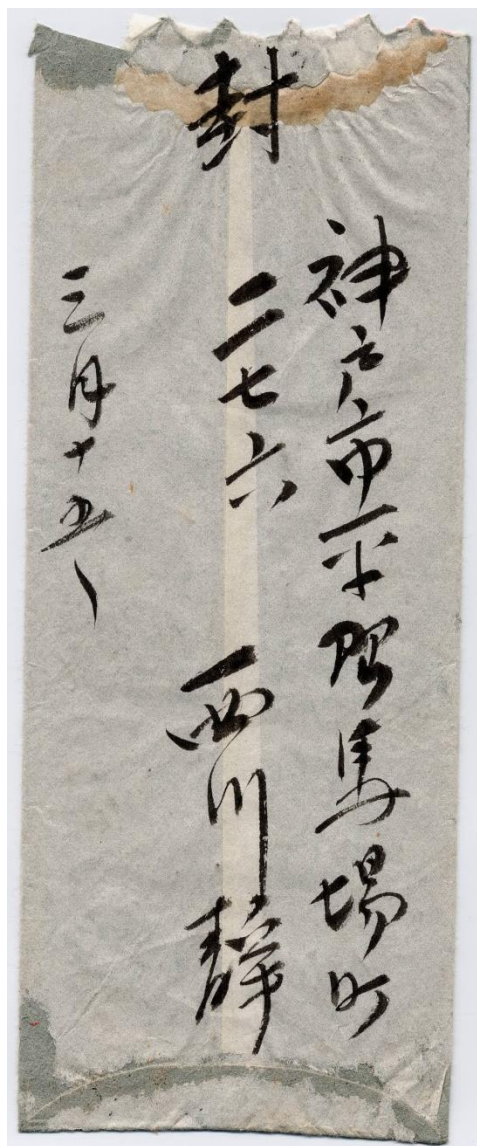
世に知らしめんと志を述べられ、準備成りて未だ果さず、復た空しく六年を経過せり。因りて太田君の許に在りし原稿と、余の儲藏せし材料悉皆とを併せて、曾て能海君と同行を試みられし寺本婉雅君に示し、追憶録刊行の事を謀りしに、君は煩勞を辭せず、諸友と相談して友誼を盡され、法主臺下より不惜身命の題字を下付したまふに到れり、余の感謝する所なり。因りて往年太田君の爲めに起草せし能海君の略傳に、新事實を附加して、序文に換ふること是の如し。

大正六年二月十六日

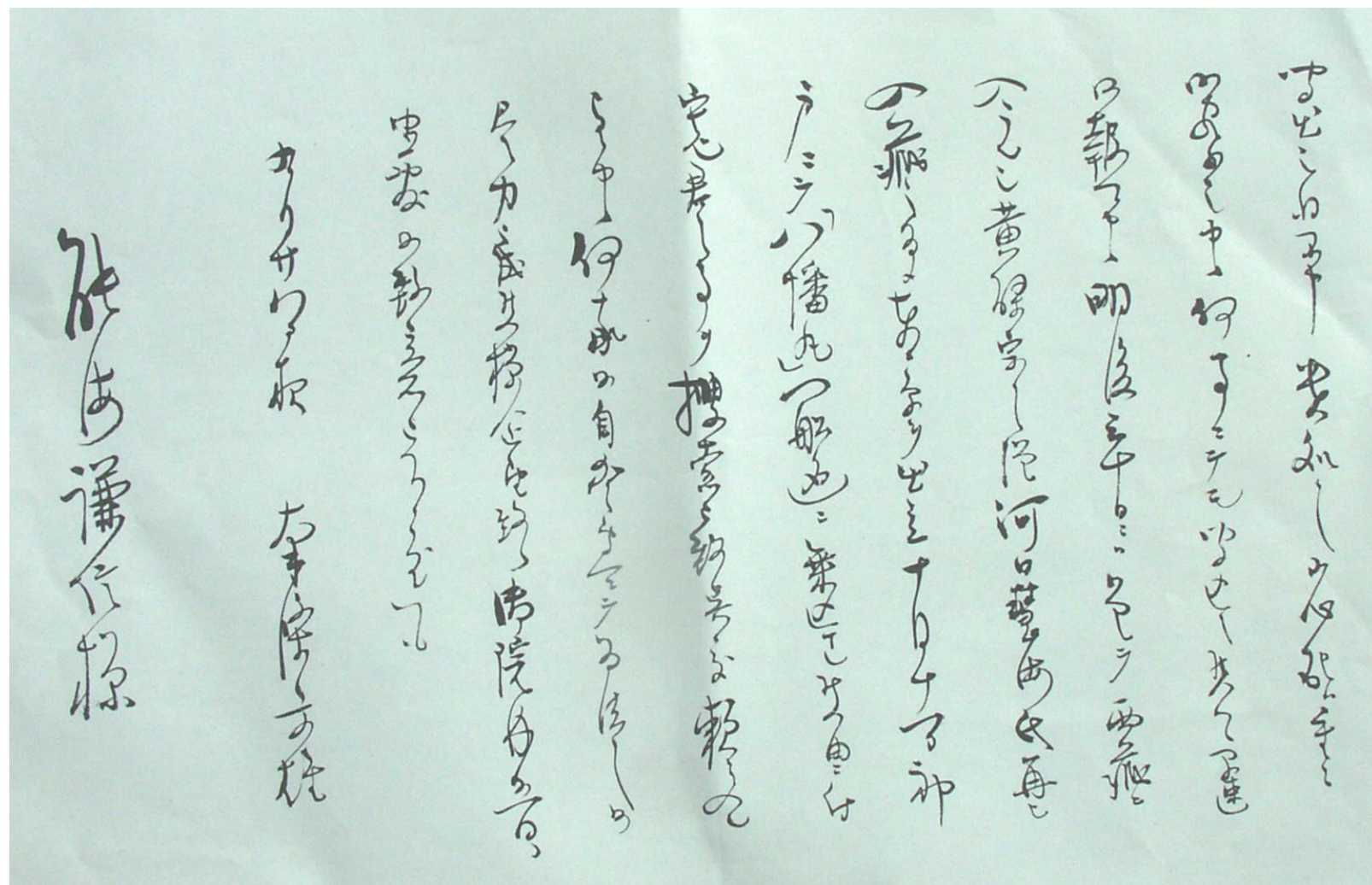
京都淳風坊客舎に於て

南條文雄識す

これによると、能海寛の探檢行は、明治19年に発願したことが記されている。



西川静 ⇒ 水野齊入 大正6年3月15日



南條博士 ⇒ 能海謙信宛書簡(河口慧海氏へ2度目の西藏探検行に寛
の探索を依頼した旨を伝える書簡)

此は先人伝来の古書なり
 書は法華経の巻送るなり
 寺本宛

寺本宛

水野齊入大兄

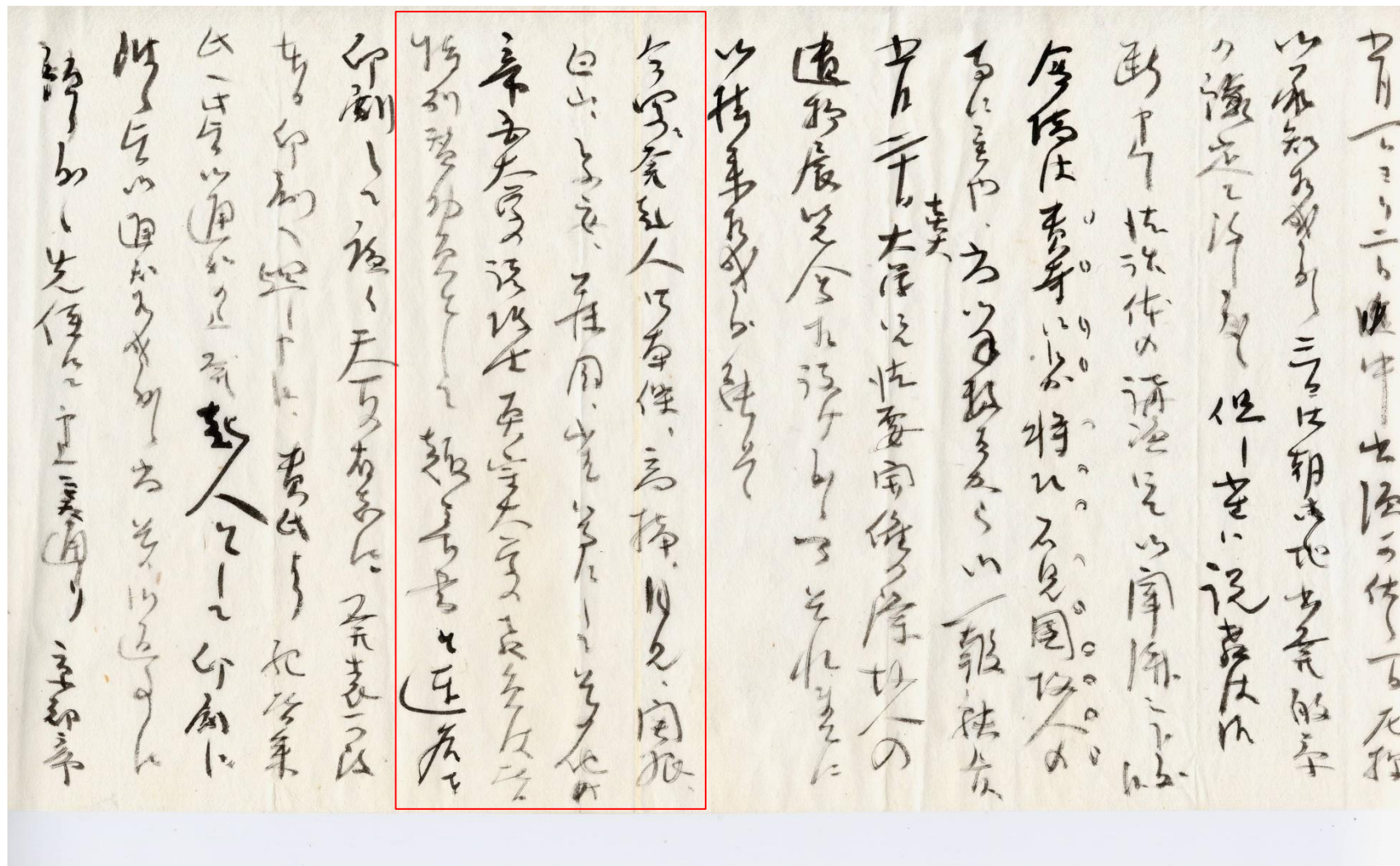
傳史

此佛阿彌陀佛長月日相持誦念南無阿彌陀佛長
 高柳町寺に於て承人として種月を得中日本山報知一月二十
 新の龍に應光
 故人の遺物行末支那の教書新書等なり
 に振動して至るの送るなり是次には振動なり、
 寺の本に於て承人として種月を得中日本山報知一月二十
 此法主台には有りなり内々書にあり
 寺の本に於て承人として種月を得中日本山報知一月二十

廣島縣山縣雄鹿宗村
 妙蓮寺
 水野齊入殿
 寺本宛

京都新馬口堂町歌元
 寺本宛
 妙蓮寺
 寺本宛

寺本婉雅 ⇒ 水野齊入 大正6年1月25日

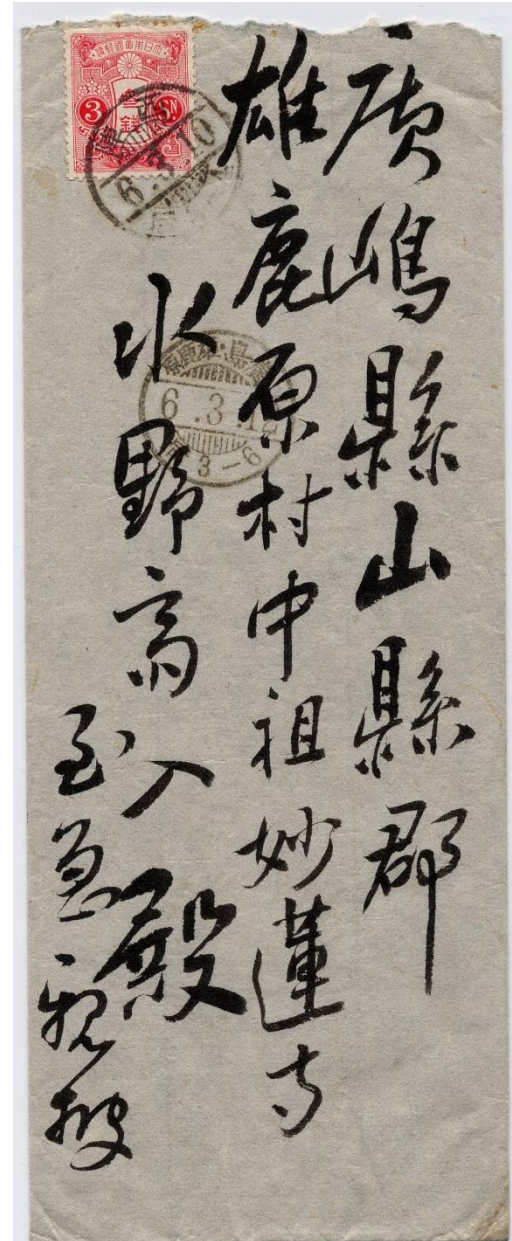
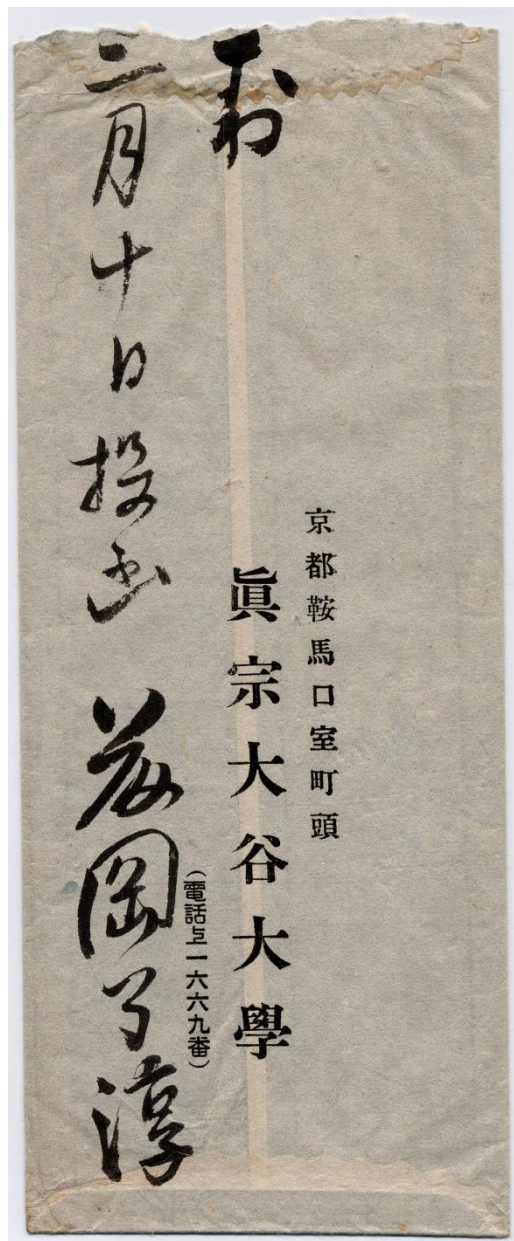


『能海寛遺稿』出版発起人は、南條、月見、関根、白山、子安、藤岡、寺本の
各氏賛助員として、帝国大学、真宗大学の博士、教員が名を連ねた。

三月二十日、
大乃大寺に参詣
し、代り市依れや
送付の上、此後
平々然る事なり

若くは

水陸寺
付書



藤岡了淳 ⇒ 水野齊入 大正6年3月10日

是より先か花分より多きものありしを
 下より上よりとて之を君に偶ぐべきもの
 といふも様よりありしものもたに防り
 防りたるまじきことなりとて防りたる
 何れかしとて各々ともなく今春各々
 未だよりいふことありしものもたに
 とも由しふことありしものもたに
 ありしものもたに防りたるまじき
 下より上よりとて之を君に偶ぐべき
 といふも様よりありしものもたに
 ありしものもたに防りたるまじき
 ありしものもたに防りたるまじき

水野齊入様

南條文雄

廣島縣山縣郡鹿原村
 妙蓮寺
 水野齊入様
 要信

未
 南條文雄
 大正六年二月七日

南條文雄 ⇒ 水野齊入 大正6年2月7日

浄蓮寺で執行された「追悼法要」には、寺本婉雅が京都を4月29日に出発して、5月1日に赴いて記念講演(2回)を行った事が判る内容である。「17回忌」を記念して、出版された『能海寛遺稿』は約550円の経費が掛かったこと。追悼法要などに350円程度の入費を要した事などが判る。遺稿集出版には、南條博士が80円、本山支出100円、残金は出版物の販売と寺本婉雅の負担で賄うとしている。浄蓮寺側には50冊程度の販売を割当てていた。中でも、天皇家への献本や島根県知事への寄贈もおこなわれたことがこの書簡で判明した。



妙蓮寺蔵

大正6年5月20日、大谷大学で能海寛追悼会が開かれた。
前列左から能海法恵、水野齊入、南條文雄、河口慧海。
後列左から2人目が寺本婉雅。河口慧海が講演を行った。

西藏行の感念

東洋の秘密文庫。世間未知の図書館と望みを
属せらるる西藏国前後蔵より薩迦の経蔵には
我々の求めて止まざる東洋学の古木なを秘蔵し
居るも不計。今迄は友人に西藏行を望み居りしも、
今や東洋問題、特に中央亞細亞問題、年々通過
し来る。我は不要多錢単奇旅行せんと。自ら企て
たり。屑々と延引せば、却って外国の為に先をと
られんと恐れたり。

「思想の変遷」より

西藏学の必要

西藏漠遊の途に上りて段々と土人等に遮られて。暫時、巴塘及び打箭炉に滞在。少々西藏經文を得て研究せし処、案外にも、其訳文の我々平生望み居る梵語原文に近きより、今は、英文よりも梵学よりも即ち、西藏文研究の愈々必要なるを感ずるに至れり。

「思想の変遷」より

戸籍削除

その後、能海寛の誕生日から100年経過後の昭和44年10月20日付の許可を得て、10月22日に、「年月日時分不詳死亡」として、戸籍から削除された。

これを以って横死情報が解決した訳ではなく、多くの謎を秘めたまま21世紀に課題を持ち越したのである。

昭和25年(1950年)9月29日付、大谷大学藤岡了淳学長より、浄蓮寺住職宛の書簡を要約すると、「近日能海寛師50回忌法要勤修あるに付き、去、大正6年(1917年)に17回忌法要を営む際に主幹の立場の関係で、南條学長、寺本教授と相謀り法要の開催、能海寛遺稿の刊行を計画、寺本氏と編集に携わり、能海師略伝原稿が自分の手許に現存しており、昨日、文庫を捜し、幸いにも見つかったため、御因縁ある貴寺へ拝送すべきが自然と存じ、貴寺で追憶資料として保存されたい。」と綴られ、「寛師支那内地より南條師宛寄贈されたる西藏經典等は南條師より、更に本学図書館に転贈され、尔後、本学書庫にて研究貴重資料として保候。」とし、二白、として、「略伝原稿4葉は、南條師の直筆である。」と記されている。そして、浄蓮寺では、寛の50回忌がしめやかに執行された。

『能海寛遺稿』の出版は、能海研究には必要不可欠の書籍であり、当時、研究者が容易に入手出来なかった為、東京の五月書房さんに依頼して、復刻版の発刊を打診、原本保管の大谷大学図書館を紹介して、復刻に至った。

その後、『能海寛著作集』が刊行され、『能海寛遺稿』と併用することによって、より研究が深まっていくと思われる。

『能海寛遺稿』の出版経緯をたどる中で、寛の生前中の生き様、即ち対人関係において南條博士、井上円了、寺本婉雅、藤岡了淳、高楠順次郎、子安善義など能海寛の探検行を心から支持していた人たちによって、十七回忌に合わせて発刊されたのである。

昭和57年6月6日、地区民が一致団結して、寛師の業績を讃え、近隣町村の浄財によって顕彰碑が完成した。



END

本稿は、第16回能海寛研究会年次大会(2011年7月10日)で会員研究発表した「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」に使用したパワーポイントをPDF版として公開するものです。

能海研究に役立てば幸いです。

【使用文献】

浄蓮寺蔵写真。『能海寛遺稿』(大正6年刊)。

『能海寛著作集』(全15巻17冊、別巻1冊・平成22年刊)。

妙蓮寺蔵写真、「水野斉入あて書簡」。

浜田市金城歴史民俗資料館寄託収蔵品(能海寛歴史資料)。

【タイトル】

「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」

製作日	平成23年7月1日
作成者	隅 田 正 三
PDF版	平成31年2月4日作成